

# コモンとコモンモラリティ

——共通共有の道德について——

永安 幸正

## 目次

- 一 人類の文明文化のターニングポイント
  - 二 人類社会が求めるコモンモラリティ
  - 三 古代倫理道德の再興と現代コモンモラリティの創造
  - 四 コモンモラリティの探求
  - 五 倫理道德のとらえ方におけるコモン
- 資料 コモンモラリティとしての最高道德

## 一 人類の文明文化のターニングポイント

古今東西、諸行無常、万物流転という。しかしながら変化発展は時を通じて一様ではなく、革新的変化が集中して生起する時期というものが現れるといえるだろう。二〇世紀を受けて、これからの二一世紀では、「グローバル化」(globalization)の流れがいよいよ加速し、人類は、かつてなかったターニングポイントを回るであろう。その新しい流れは、従来二〇世紀までのタイプの産業経

済や文化交流にとどまらず、特に科学技術と密接にかかわる環境、生命、情報という三つの次元にわたるであろう。この変化が新たなコモンモラリティ（共通共有の倫理道徳）を求めるであろう。その変化を展望すると、以下のとおりである。

#### (一) 地球環境の制約と人類の運命共同体

一九七〇年代の初頭にローマクラブが『成長の限界』（Limits To Growth, 1971）を発表し、資源枯渇と環境汚染により、人類の無限の成長は不可能であることを示した。それがために、石油ショックが世界を覆った。それは石油の枯渇の結果ではなく、枯渇するのではないかという「意識の上でのショック」であったが、その頃から「宇宙船地球号」とか「ガイア」（母なる生命地球）という考えが広まった。さらにその後、深刻化する地球環境問題が深刻になってきて、人類が地球システムの「アイデンティティ」（自然は変らないという自己同一性としての秩序）をゆるがし始め、全人類社会は一つの船に乗り合わせた運命共同体だという考えが強まった。そして、安定した地球環境を維持するためお互いの生き方、考え方を導くコモンモラリティが求められるようになっていく。コモンモラリティとは、全人類にとっての共通共有の道徳のことである。

#### (二) 不変の自然から可変の自然へ

自然では物質界はほぼ同じままを繰り返しつつ永遠不変であり、変化するのは人間の精神と行動

だけである、という観念が通用してきた。しかし、進化論によりその永遠不変という観念の根本が覆された。しかも自然界のアイデンティティに人類が相当程度侵入しはじめた。

原子核の操作と遺伝子の操作が行われ、人造的科学物質の弊害が発生し、地球温暖化による熱平衡システムの破壊が起こりつつある。もはや、「年々歳々、花、相似たり、歳々年々、人おなじかず」という対比はできなくなった。花も品種と性質が変わっていくからである。人類は共同して、望ましい状態の自然環境を不変に保たねばならないことになった。

#### (三) 生命の聖域の崩壊

人類の生命情報が解読され、生命技術がますます発展して、自然の生命秩序というものが攪乱され破壊されるかもしれない。このまま進むと、変化する地球はついに心変わりして、人類という生命を「もう要らない」と、捨て子にするのではないか。人類には、そうされないように、地球環境と人間の心身という二つの自然について、「どんな自然を望むのか」を人類みずから決めて、それを維持する責任がある。人類が皆で知恵を出し合って決定し、共有し、実行すべき「コモンモラリティ」（共通共有の道徳）が求められるゆえんである。その基本は、環境、生命、情報の領域でのコモンモラリティにある。

(注) 以上の二〇世紀における文明の転換については、難波田春夫『近代の超克』行人社、そして最近の科学技術の動向をふまえた議論は加藤尚武『見えてきた近い未来／哲学』ナカニシヤ出版、など参照。

## 二 人類社会が求めるコモンモラリティ

グローバル化とは、地球上の人類全員が「一息をする」ようになることである。もちろん、それは多少とも、人類の発生以来、何百万年も昔からの事実なのである。人類は地球を巡回する大気を共有し呼吸してきた。しかし、肝心なことはこの事実を、無意識にはなく、「皆が心に意識しそれと知って行う」ようになることである。グローバル化では、人々がお互い好きでも嫌いでも、地球の端から端まで、それと意識して影響し合うようにするほかない。

### (一) グローバル市場革命のインパクト

そこで必要となるのが、まず物の取引たるビジネスでの共通の倫理道徳である。最近のニセモノ商品、有害商品の氾濫は、目を覆うばかりである。それは騙す自由主義と隠す自由主義の横行を表わすものである。

今日の「グローバル市場革命」(全球的市場革命、the revolution of global marketization)は、人間の相互依存を、自由な売り買いの原理で組み立てる。それは、国境を越える市場競争が激しくさせて、国家という人類の「棲み分け」方式を掘り崩していく。富の奪い合いでは、帝国主義等古い型の戦争は減るだろうが、かわりに「資本の競争」を地球上に拡散し、人々は毎日、証券市場の変動に一喜一憂する。情報通信技術の革命とあいまって、人類は顔のみえる人々でなくなり、顔の

見えない「投機に血道を上げる人々」が、お互いをだまし合う。われわれは、投機会社をいかに公正で安定なものにしようか。

### (二) 人類文化の本格的交流と政治システムの情報化

市場経済はまた、多種多様な文化を画一化する。どこでもファーストフードの文化が売られ、「マクドナルド化現象」がはびこって、歴史とか文化の多様性が削り取られる。

当然、理念の形成と利害調整機能を担う政治も変わるほかない。政治の分野では、民主主義が万国のあいだで共有価値となりつつあるが、民主主義というものが空転することはすでに一九五〇年代に「アローの定理」として証明され、民主主義の限界が反省された(拙著『政治経済学』成文堂)。加えて、情報通信革命により、政治空間で付和雷同と流行が人々の心をつかむ。政治の情報化が促進され、政治家の人氣が数カ月でいとも簡単にひっくりかえる。政治家は、あたかも人気商品が使い捨てグッズになってしまうのと同様に、「使い捨て人間」となる。政治空間でも、マクドナルド化が進む。グローバル社会では、安定した政治システムは容易に語れない。

(注)マクドナルド化という現象については、ジョージ・リッツァ(正岡寛司監訳)『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、を参照。

### (三) 世界共通の精神およびルールの作成と共有

これからの社会での倫理道徳は、ワールド・サッカーを例にして考えるとよい。サッカーでは、世界中どこでも同じようなルールがあり、フェアプレーがないことにはゲームができない。だから、次のような動きが進んでいる。

- ① 共通の価値観とルールと作法を作る。(立法)
  - ② 共通の価値観とルールと作法を守るようにゲームを運営する。(行政)
  - ③ 共通の価値観とルールと作法を破る人を見つけて処罰する。(司法)
  - ④ 共通の善価値を追求する道徳を実行する。(精神と行動)
- こうして、ゲームのあらゆる方面で、共通の基本価値とルールを作ろうという精神が高まり、その精神に基づいて共通ルールを作り、そのルールによるゲームを行い、そのルールの下でよい精神と作法を開拓する。これがコモンモラリティへの努力である。

いま、このようなスポーツ界に限らず、ビジネスでも環境でも、さまざまな領域で、新たな「人類共同体」への探索が始まっている。ここでは、社会倫理とか社会道徳に「共通のもの」(コモン)を作るからこそが、人類が「一つ息をする」ということであり、宇宙船地球号という「運命共同体を生きたる」とである。

ここには、共有された最少限の共通価値というものが求められる。人類世界はひとつのコミュニ

ティとして、そうして統一の中で、多様性を開拓する。これは単なる「多様の中の統一」でなく、生命系の全体秩序の中の多様性、つまり「統一の中の多様」なのである。

(注)この点は、アミタイ・エチオーニ『新しい黄金律』麗澤大学出版会、参照。

### 三 古代倫理道徳の再興と現代コモンモラリティの創造

世界の歴史を振り返ると、異なる宗教の開祖や道徳学派の始祖となった偉大な人物がたくさんおられる。「聖人」とか「人類の教師」と呼ばれる人々である。つまり古代では、地球の西の方からたどると、ギリシャで活躍したソクラテス、今のパレスチナ・イスラエルに生まれたイエス、インド亜大陸北部で活躍したシャカ、古代大陸の山東地方に出た孔子がいる。時代を下ると、アラブの世界の預言者でイスラム教の開祖となったムハンマドがあり、それ以外にも各国・各地方に偉大な人物が現れ倫理道徳を示している。日本でも古典に表わされた倫理道徳が存在している。

#### (一) 人類の教師の倫理道徳 ― その再興と共有化 ―

現代の人類の倫理とか道徳では、こういう古代の人々が示された生き方の指針や原理がいまなお決定的な働きをしており、そこに人類社会全体にとっての共通性が見いだされる。まず、誰でも思い起こすのが人間関係の二つの「黄金律」だが、他にもいくつかの共通内容がある。それはソクラテスの教え、イエスの山上の垂訓、釈迦の説教、孔子の言行録、ムハンマドの教え、日本でいえば

古典に見える「清明」の教え、というものに表現されている。幾つかを挙げると、次のようである。

- 「あなたの欲する物事を、他の人にも行いなさい」
- 「あなたの欲しない物事を、他の人に行わないように」
- 「あなたの隣人を、愛しなさい」
- 「家庭では、あなたがたの父母を敬いなさい」
- 「みずから、節欲に努めなさい」(贅沢や大食は罪です)
- 「欲望を滅却しなさい」
- 「みずから、額に汗して仕事をしなさい」
- 「国法を順守しなさい」
- 「生きとし生けるものを、いつくしみなさい」
- 「恩に報いる報恩の人生を歩みなさい」

もろもろの宗教は、まじめに生きようとする人々に、「永遠のいのち」の可能性を約束する点で共通する。このような叡知は、人類の「古代コモンモラルティ」として、現代に生きているといえるであろう。(資料2、5、6)

## (二) 現代コモンモラルティの原理

こうした古代の知恵と倫理道徳の上に、現代のコモンモラルティが出来つつある。現代の文明と文化は、次のようにどれも幾つかの基本的な指針や規範を共通に保持している。(資料12と比較)

### ①自律 (autonomy) の原理

人は、自分自身で自由に物を考え、行動し、自分の理想とする幸せを目指してよい。そして、その努力の結果については、他人に責任をなすりつけない。責任は自分自身で取る。

### ②無危害 (nonmaleficence) の原理

人は幸福を追求するとき、他人や地球環境に危害を加えてはならない。

### ③仁恵 (benevolence) の原理

人は、神仏・天地自然が自己を愛してくれると同じように、他者を愛し他者の利益(りやく、benefits, grace)を高める。

### ④正義 (justice and fairness) の原理

人は法の下での平等を保証され、自分の幸福を追求する自由・自律を他から制限されてはならない。

この簡単明瞭な四つの原理は、近代社会のコモンモラルティであり、一七、八世紀からの歴史をもつ。つまり、近代は、自由・平等・博愛を旗印に出発したが、他方で戦争と帝国主義と人種差別

を行ってきており、また、資本主義下の搾取、身障害者への不当な扱いなど、そうした陰の側面を克服し、日常生活において実践的に有効なガイドラインを形成しつつあるといえる。

(注)現代倫理とその四原理については、ピーチャム／チルドレス『生命医学倫理』成文堂。

### (三) 倫理道徳における精神作用の偉大な効能への着眼

また、この四原理には表現されていないが、もう一つ、無視できない点がある。倫理とか道徳といえ、社会の決まりとかルールにしたがう行為あるいはエチケットというふうに理解される。もちろんそれで誤りではないのであるが、行為する際に絶えず心の内部で何を考えるか、感じるか、思うか、判断するかという精神作用 (mental attitude or activity) が決定的な働きをする。この事実を、倫理道徳の実行及び研究はもつと重視する必要がある。(資料4)

こういう領域は、古来宗教のなかで深く窮められてきたが、今日では心理学的な技術としてビジネスやスポーツなどでも開発され活用されている。

例えば、医療では、「どういう精神で治療に当たるか」「患者はどんな心で治療を受けるか」に注目することによって、治療効果の違いが生じるのみでなく、医者自身のみずからの健康や技量の向上などにおいて、短期的にも長期的にも、偉大な効果が生まれる。その気になって観察し反省して見れば、医療のみでなく、学問研究でも、商品の製造と販売でも、情報通信でも、教育でも、政治でも、こうした例は枚挙に暇がない。(資料9)

## 四 コモンモラルティの探求

そこで、コモンモラルティというコモンとは何かについて、その意味するところを考えてみよう。コモンモラルティというものは、共通道徳ないし共有道徳という意味であり、必ずしも価値的にみて普通レベルの道徳という意味ではない。普通レベルの価値の部分もあるが、より高次元の価値の部分もある。むしろその方に重要性が見いだされる。

そもそも、コモン (common、もしくはコモンネス commonness) という言葉でわれわれが意味する物事は、何であろうか。元来、コモン (common) ということを考える理由は、異なる物事の間にか「共通の性質」を見い出したいという必要があるいは感覚を、われわれが抱くところにある。コモンとは何かを確定するには、特殊性、共通性、それに普遍性という概念の相違と関係を明らかにしなければならない。(図1)

### (一) 共通性・共有性としてのコモン

われわれがコモンという場合、まず、「異なる存在の間で重なり合うもの」というふうに考える。つまり、共通性 (common、コモン) としてのコモンである。

コモンとは、異なるもの間に見い出される共通の要素や要因である。それぞれ異なるものを円で表し、異なる円が重なり合えば、その重なり合うところが共通つまりコモンである。(集合論では

ANBN C……と表される。

例えば、人という動物において、男と女ではその共通性は、頭、手足、胴体、目が二つ、口が一つある、という点などが挙げられるが、遺伝子にも人としての共通性がある。

これに対し、「特殊性」(specialty, or particularity) というものもある。特殊性とは、お互いの間で重ならないところ、例えば遺伝子の違いなどである。

また、「普遍性」(universality) という観念もある。普遍性とは、すべての円の表す範囲の全体を指すので、全体性と言ってもよい。例として、人類は遺伝子に異なる部分を含み、それぞれ男の特殊性、女の特殊性を持つし、個人毎に違いもある。しかし男も女も「人であるという事実」では共通性をもつ。そして、人とは、男と女とからなる動物の全体(ヒト遺伝子を保有する動物)のことであり、これを人としての普遍性という。この意味での普遍性は、単なる全体性ではなく「特殊性と共通性とを含む全体性」といってよい。(図2)

### (二) 異文化の間のコモン

コモンということが特に必要となるのは、グローバル化にともなって発生する異なる文明・文化の間での対話や交流や衝突の場合である。異なる文明や文化には、その間にはかなり多くの同じ要素が発見できるものであり、それを共通性という。例えば、日本と中国の間には、漢字を使い、箸を使い、醤油(アミノ酸調味料)を使い、儒教の教えが重要な役割を演じるなど、いくつも共通の

要素が見い出せる。東アジア文化という観念が成り立つゆえんである。

倫理道徳との関連で最も重要なのは、宗教であろう。宗教は救いの観念とそれに至る方法の点で、お互いを異なるものとする傾向が強い。自分たちのものが他より優秀である、と主張するのである。しかし、宗教の間の対話も進んで来ている。それは何らかのコモンを見い出し、あるいは新しく造り出して、共存(co-existence)と共生(symbiosis)への道を探ろうとする試みである。(資料6)

### (三) 人間活動の広がりコモン

人間の活動は、個人から始まり、狭い家族の一員、地域社会の一員、学校とか趣味の組織や団体あるいは会社などのような組織・団体の一員、国家の一員、人類世界の一員、地球生命圏の一員、というように狭い範囲から広い所にまで亘る。

その時、倫理道徳には、次の二つがある。

①人類集団のすべての範囲に一貫するもの

②ある範囲までは一貫するもの(ある国家や地方の範囲にだけ通じるもの)

この観点からすれば、グローバル化とは、地球大(全球的)の範囲で共通性つまりコモンを形成することである。例えば、地球環境保全への対策もそうだが、世界貿易機関(WTO)の哲学とルールは、あらゆる人々、会社、国家に一貫する共通ルールを目指すものといえる。もちろん、こうしたグローバル化の中でも、各国の特殊性を保護する規定(セーフガード条項など)が含まれる。

#### (四) 人間生活の諸活動部門の間のコモン

人間の生活は、いろいろな活動部門からなる。宗教のような価値、科学のような知識の獲得、教育のような知の伝授と人間開発、政治のような人間関係の統合、経済のような物質資源の獲得と配分、科学技術の活動、自然環境の開発などである。

これら各部門すべてに適用される倫理道德の原理がある。それもコモンモラリティと考えられる。それぞれの部門のモラルが共通の原理に立っていないければ、人間の各生活領域は分裂するからである。例えば、どんな部門でも、人の価値を同等のものとして認めること、働きに応じて報酬が与えられることなど、コモンとしての原則はいくつも存在する。(資料3、10、11)

#### (五) 歴史通時性の観点から見るコモン

人類の活動には、過去から現在そして未来へと至る歴史の流れを通じて一貫するものがあり、歴史にもコモンというものを考えることが出来る。それには次のような種類がある。

- ① 特定の時代にか通じないもの (特殊・コモンでないもの)
  - ② いくつかの時代に共通のもの (限定されたコモン)
  - ③ すべての時代に通じるもの (普遍的なコモン)
- 歴史には、しばしばこれらが重なり混じり合って存在する。(図3)

### 五 倫理道德のとらえ方におけるコモン

倫理道德では、それを有効なものにするには、

- ① 理想とする目的価値
- ② それを実現する方法
- ③ 獲得された結果についての評価 (受け止め方、意味解釈)
- ④ 道德実行に際しての環境条件

について、総合的に考察する理論体系をもたなければならない。そのとき、宗教の立場から考察することもできるし、おそらく歴史上では、宗教がもっとも有力な考察の土台を提供して来た。しかし、現代では科学的・実証的な思考が人類の頭脳の中に成長してきており、宗教的考察とともに、決定的な力を発揮している。

もう一つ大切な点は、現代の倫理道德では、「因果律的思考」(the thinking of moral causality)が求められるということである。それは、「こうすることが出来る」(実行可能性)と「こうすればこうなる」(予測可能性)とからなる。敢えて、無効なあるいは有害な倫理道德を実行しようとする人は、われわれ人類の仲間にはいない。しかも、倫理道德の因果律思考には、その内容として、条件が同じならばどこでも当てはまるという「斉一性」というものが含まれる。また当然のことながら、倫理道德のガイドラインは「無矛盾」であることが理想である。



図 1

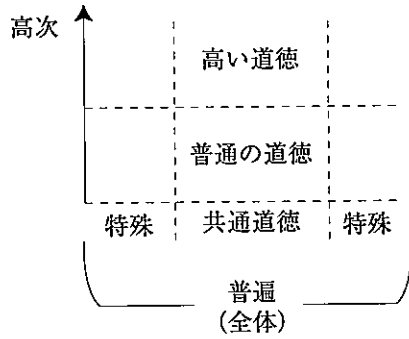
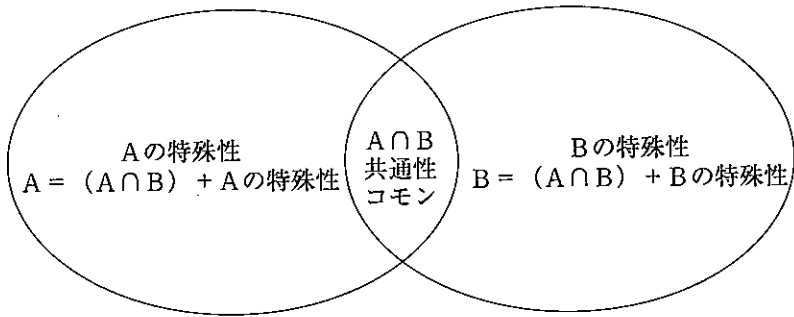
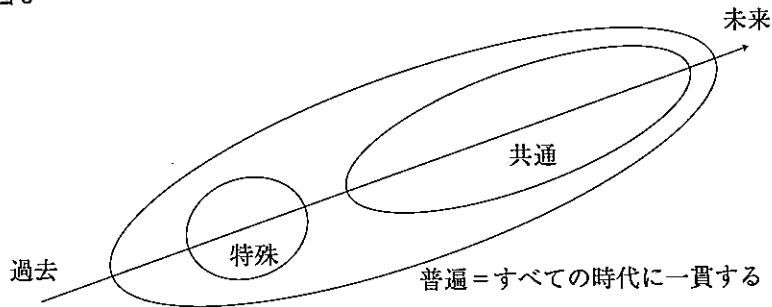


図 2



普遍性とは特殊性と共通性の全体である A

図 3



こうして、因果律思考は倫理道德でも「コモンな思考方法」である。倫理道德が、何らかの有効性 (effectiveness)、有益性 (utility) を求めるといふことは、今後の人類の倫理道德でも不可欠であり、それを確保するには、古来の宗教アプローチとともに、現代の「科学的・実証的な因果律思考」(the scientific and empirical thinking of causality) を十分にふまえて、コモンモラリティとして確立する必要がある。(資料Ⅱ)